

古美術・工芸のこころにふれる

目の眼

Meno Me

12
2009

特集◎ 日本刀 五ヶ伝の旅

其の壱 大和五派 前編(千手院・当麻・手搔)

特集2◎ 扇子を現代に活かす

ありがとう
400号!!
目の眼
Meno Me
400号!!



図2 大扇「弁慶と牛若丸」
大英博物館蔵

れ、幕末、明治、大正期にかけて最盛期を迎えた。京都からヨーロッパへの扇子の輸出は、当時の日本の重要な輸出産業の一つとなった。1920（大正9）年のピーク時には、年間総輸出数が441万9千838本に及んだほどであった。

明治中期、日本は新興産業国家として自国の国力や文化を欧米に紹介するために、世界万国博覧会への出展参加を盛んに行った。当時、日本の扇子業界の代表者であった石角喜三郎は、明治政府の依頼を受けて、1892（明治25）年、京都美術工芸の粋を集めて高さ2・5m、広げた幅5m、重量11kgという巨大な扇子（図1、図2）を制作した。欧米人が驚くような日本の美術工芸品を作ろうと試みたのである。この大扇子は評判を得て、その後も世界各地の万国博覧会に出品され、最終的には2001年に大英博物館に所蔵されて同館に密蔵されるに至った。

しかし、好調な時期ばかりではなかった。第一次世界大戦によって、ヨーロッパ各国の貴族的社交界が閉塞した



3代目・石角完嗣氏

ために、著しい需要減に見舞われ、日本の扇子輸出量は打撃を蒙るといふ苦しい時期もあったのである。

●モダンな楽しみ方

初代・石角喜三郎が明治期に大扇子を作った世界を驚かせた精神を受け継いでいるのが、5代目・石角完嗣氏。氏は、日本の芸術・文化をもっと海外に広めたいという思いから、骨董扇子を扱ったり、新しい現代扇子を制作したりしている。

石角氏に現在のライフスタイルに合った扇子の活用法をうかがったところ、扇子を絵画として、額装にして壁に飾って楽しむことを提案された。いかにもモダンな楽しみ方である。



図1 大扇「嵐山園」大英博物館蔵

特集2◎扇子を現代に活かす

●扇子の歴史

扇子は、うちわを折り畳んで携帯に便利なように仕立てた、8世紀頃の日本の発明品である。その製作には、絵師、詩絵師、塗師、扇骨業、箔師、折師、附師、装師、デザイナー、コーディネーターらが関わって、いくつもの工程を経た上で完成する、かなり手のかかった美術工芸なのである。

そもそも歴史的には、扇こりもちわのほうが古く、紀元前に中国やエジプトで用いられていた。うちわが日本に伝来したのは7世紀頃と言われている。

平安貴族たちは、扇子をおおぐためだけでなく、儀礼、贈答、コミュニケーションの小道具として用いた。武士階級でも、刀剣と同様に尊重された。

日本で発明された扇子は、大航海時代に中国経由で西洋に輸出され、上流階級の女性の必須の携帯品として大流行し、社交界でもてはやされた。17世紀のバリでは、扇子を扱う店舗が150軒を越えるまでになったのである。日本の扇子は、京都を中心に製造さ



図6 骨董扇「鶴図」
長さ22.8cm

●さまざまなお扇子
扇子にもいろいろな種類があって、石角氏は、次のように分類している。
まず、クラシック扇(図3、図4)は、まさに欧米の社交界で貴婦人によって使われた華麗なもの。明治・大正期頃(1890~1914年)の制作。絹布地に繊細な刺繍がほどこされ、骨の部分については、図3は紫壇に剣貫細工。図4は、象嵌に剣貫細工が駆使されている。現在、絹布地に刺繍をほどこす職人がおらず、また、輸入規制

もちろん、扇子をそのままインテリアとして飾るのも、一つの方法である。掛軸を飾るのには床の間などのスペースが必要だが、扇子ならば飾るのに広い空間を必要としない。広げればそのまま飾れ、畳めばさっと片づけられる。そういった手軽さからも、扇子のコレクターは欧米で増えつつあるという。また、贈答品として用いるのも喜ばれる。まさに扇子は、現代的な感覚で多様に楽しめる美術工芸品であろう。

図3 クラシック扇「薔薇に蝶図」
長さ20.5cm



図4 クラシック扇「桜に孔雀図」
長さ20cm



図5 骨董扇「日の出図」
長さ27cm



図9 新作現代扇「蝶魚園」2007年



図10
新作現代扇「ちよもと園」

象牙を用いることができないので、竹を用いている。その竹の扇骨の表面を漆で仕上げ、さらにその上に蒔絵を施した豪華な作品。当初、蒔絵師に頼んだところ、扇骨のような平面に蒔絵を施すのが難しく、試行錯誤の末にようやく図のようなモダンな作品に仕上がった。

図9、図10は日本の扇画家が描いたものだが、新作現代扇は、日本の扇絵師に限らず、アメリカやフランスの画家にも依頼している。そういう意味で、グローバルな工芸品となっており、現代の空間にもマッチする仕上がりである。

欧米人でも骨董扇を求める人もいれば、モダンな図柄の新作現代扇をほしがる人もいて、好みは様々。

各々の住空間や生活、好みに合わせてインテリアとして用いたり、美術コレクションとして楽しんだり、活かし方はいろいろである。

■素材協力/石角陽隆会



図7 浮世絵扇「風流舟遊び図」三代歌川豊国画（オリジナル木版画）長さ28cm、扇骨 黒漆塗り竹製



図8 浮世絵扇「合戦図」
月岡芳年画（オリジナル木版画）1866年
扇骨 黒漆塗り竹製

によって象牙を用いることはできないことから、新しくは製造できない貴重な扇子である。

次に、竹董扇（図5、図6）は、日本の伝統的な図柄が特徴的な輸出用に作られた扇子で、石角氏が収集したものである。図5は昭和初期、図6は大正期の制作。

浮世絵扇（図7、図8）は、文字通り浮世絵を扇子に仕立て直したものが、浮世絵自体は江戸・明治のものである。現代に扇子として作り直したものである。しかし、浮世絵ならどれでも扇子に作り直せるという訳ではない。浮世絵は、基本的に縦長の作品が多く、扇子にするには通常3枚つづきの絵柄を張り合わせないと紙幅が足りない。さらに、扇子に作り直すときに水分を含ませるが、そのときに絵具が滲んでしまうことがあり、作品を無駄にしてしまう場合があるのでやっかいなのである。

ところで、現在、石角氏が創意をこらして制作しているのが、新作現代扇（図9、図10）である。扇骨の部分に